

# メダルや貨幣に 使用される銅

一般社団法人 日本銅センター 副会長  
 一般社団法人 日本伸銅協会 会長  
 古河電気工業株式会社 取締役会長



柴田 光義

東京オリンピックが、いよいよ来年7月に迫ってきました。猛暑が懸念される場所ではありますが、56年ぶりの日本開催でもあり、世界を感動させる素晴らしい祭典になることを祈っております。オリンピックと言えば金・銀・銅メダルを思い起す人が多いと思います。メダル獲得は、選手のみならず参加する国や地域の大きな喜びであり関心事です。これら3種類のメダルは、金・銀・銅の貨幣制度がモデルになったと考えられます。そこで、日本における貨幣、特に銅貨の歴史に触れてみたいと思います。

最古の铸造銅貨は、7世紀の「富本銭」と言われていますが、まじない用であったか流通貨幣であったかは定かでないようです。流通貨幣としては、708年に铸造された「和同開珎」が最初であり、それ以降も平安時代中期までの約250年間に、12種類の銅貨が铸造されました。これらは朝廷が発行したことから「本朝十二銭」と呼ばれ、京や畿内を中心に流通したようです。



和同開珎

鎌倉時代や室町時代は、国家的な貨幣の铸造・発行は行われず、中国から流入した銅貨（宋銭や明銭）が広く流通しま

した。江戸時代になると、新たな貨幣の導入が進み、金・銀・銅の三貨制度が確立されました。銅貨としては、約600年ぶりの国家的な铸造・発行となり、「寛永通宝」などが全国に広く普及しました。現在も、アルミニウム製の1円貨幣以外は、500円貨幣にニッケル黄銅、100円と50円の貨幣に白銅、10円貨幣に青銅、5円貨幣に黄銅といずれも銅合金が採用されています。

このように銅貨は、1300年以上の昔から存在し、長きにわたり人々の経済活動を支えてきました。多くの伸銅品は、貨幣ほど人の目に触れることはなく控えめではありますが、産業と暮らしを支える、なくてはならない重要な素材であり、今後も将来の技術革新を担う機能性材料としてオリンピックメダルのように燦然と輝き続けることを期待しています。



現在の銅貨幣

## 銅 目次

- 2 カパーロマン  
メダルや貨幣に使用される銅  
柴田 光義
- 3 銅の歴史物語  
青銅製和鏡が紡いだ苦難の歴史
- 4 ルポルタージュ  
茨城県桜川市  
メガソーラーの電線太径化で  
エコと銅需要を同時に加速
- 6 ユーザー訪問  
多品種・小ロット対応で差別化を図る  
銅管を駆使した  
カスタムメイドの熱交換器
- 8 リレー随想  
「銅の不思議な世界」を  
さまざまにつづける  
早川篤史
- 10 カパーワールド①  
特殊銅合金で世界と勝負！  
航空機分野の下町ロケット
- 12 カパーワールド②  
不可能と言われた  
銅合金の3D積層造形技術を確立！
- 13 カパーワールド③  
トランペット奏者に寄り添う  
世界に「ただけ」のマウスピース
- 14 銅センターニュース  
トピックス